



トマトをたべるのをやめたとき version3

2003.3.7 (fri) ▶ 3.9 (sun)

place : 麻布die pratz

# DA・M Theater

MSA collection 2003 参加

DA・M Theater Presents

## When They Stopped Eating Tomato

Improvised Physical Theater

開場・開演 | 3/7(金) 19:30 | 3/8(土) 19:30 | 3/9(日) 17:30

※8日公演後アフタートークあり。

### ■料金

前売り / 一般¥2,800 学生¥2,000

当日 / 一般¥3,300 学生¥2,500

MSA collection 2003 フェスティバル通し券 / 一般¥8,000 学生¥6,500

(die pratzのみ扱い / 1 演目につき 1 回有効)

### ■チケットご予約・取扱い

チケットぴあ 0570-02-9988

DA・M 03-3368-0490 / proto@pop16.odn.ne.jp

麻布die pratz 03-5545-1385 (水を除く 18:00~23:00)

神楽坂die pratz 03-3235-7990 (火を除く 13:30~18:30)

### ■お問い合わせ

DA・M 03-3368-0490 / proto@pop16.odn.ne.jp

### ■Information

<http://village.infoweb.ne.jp/~dam/>

■出演 / サキ 八重樫聖 今井あゆみ 中島彰宏 都丸永子 ■構成・演出 / 大橋宏

■音楽・演奏 / 竹田賢一 ■舞台美術 / 吉川聡一 山崎久美子 ■宣伝美術 / 金丸悠児

制作 DA・M

助成 日本芸術文化振興基金 



「夢に意味がないのではなく、それを理解する方法(言葉)がないのだ」 フロイト



Photo by Hideyo Tanaka

この作品は、観客をそこに迎え入れるためにあらかじめ用意された、たとえば堅牢な建築物ではない。この作品は、一回毎の上演の中で、その上  
演の瞬間毎の現在の中で、初めてその姿を現す。つまり今、ここ>でく上演と劇>が同時に創造される。一般的な用例に従い即興演劇>であ  
る。だから上演以前に用意されるタイトルは、この上演を記憶から引き出す「ラベル」のようなものであり、上演の内容と直接的な結びつきを持たない  
。一見無関係な言葉と上演がセットされ記憶のなかで発展し続けることもあるだろう。だが、今回のタイトルは、私にとってより重要な意味を持ち  
始めている。初演(2001.9.7-9)直後に遭遇した出来事「9. 11」の記憶をとどめはじめているからだ。想像を絶する暴力の映像、それに引き続く  
果てしない暴力の連鎖、私はその出来事を、自らの内になら確認できない。われわれの身体が世界とますます切り離されていく。瓦礫に、砂  
に、埋もれた死体のように、われわれの身体が日常の中で何処かに奪われていくのだ。

2002年夏、ドイツ・ハンブルグで行われたフェスティバルでこの作品を上演し、観客とのアフタートークを行った。「はじめ、とてもイライラした。  
でも見ているうちに私自身の現在の状態を思い起こした」「なぜパンが出てくるのか」「ヒロシマとの関係は」「9. 11との関係は」「意味なんて誰も  
わかりやしない、今日はそれが見えて良かった」「何も完成しないことが一番よかった」「あれだけのパンがあればアフガンの子供たちは助かるな」観  
客の関心は次第に内容の読みとりから、それぞれの自由な受け止め方へ移っていく。意味論的に読みとられることを予測しつつ、今回の作品の中には  
意味表意性の強いシーンを挿入している。初演時にはなかった要素であり、シンプルさや強度は薄くなったかもしれないが、ある純粋性を見るもの  
の視線を一点にし、ある心象を形成する。この了解こそ今拒絶すべきものではないだろうか。「ここで何が起きているのか」そして「われわれは何を見  
ているのか」「見えていないのか」見ることの困難さとあやうさ。

即興公演の困難さは実は「自由に動く」ことよりも「自由に見る」ことにある。今、ここ、で行われていること、それを速度、方向、位置、距離、  
強度等々といった幾つもの「動きのモメント」に還元し判断し、多様な「相互行為」へとつなげていく。さらに見ることは、眼だけではなく身体的な  
行為でもある。足音の感覚、歩幅や歩数の認識、場の凝縮感。計測値がずれた場合、1人で行う即興は自己調整できるが、集団即興の場合、何も生み  
出せない危うさがある。「では即興での作品性は?」。演出や振付によって意味づけられ、あるいは理想的なカチを演じることで舞台を強固にしてい  
くことではなく、むしろこの危うさそのものを舞台に成立させていくことにこそ、即興の強さがあるのだろう。「相互行為」に一定の枠を定めていく  
ことにより、情報の量や質を限定し、切り取られる<現在>の興行を確定する。一回毎の舞台相模は違っても即興上演は自らの「作品性」を主張  
する。身体を見つめる視線はエロチックで反社会的で固有だ。身体はそこに堆積する多層な生の断面<現代>を開示し始める。

戦争とはつまり身体を奪う暴力なのだ、というならば、すでに暴力がわれわれの日常そのものになっている。一方で物質的実態を持たない仮想世界  
が広がり、またその一方で他者を排除する同質世界がますます閉じていく。身体は行き場を失い、その事態を前に、どのように身体を見出せるのか。  
それは決して実体的な身体ではないだろう。今、ここ、という場に錯綜する無数の他者の視線、その網目に残された余白を見つつけ出しながら身体を投  
棄していくこととすると、身体は切れ切れになり、明滅しながら錯乱する・・・投棄され続けていく身体のかすかな残像に、どんな意味を読み取るこ  
とができるのか? 切迫する事態を前に、だが、性急な意味回収は危険だろう。むしろ高まるわだかまりの霞の中、自らの身体の内にある宇宙的沈黙  
感にその残像を発信しつづけていきたい、そう希望するのだ。

大橋 宏 (DA・M) : (セゾン文化財団ニュースレター「viewpoint」  
2002年11月号より抜粋 / 一部訂正加筆)

# トマトを食べるのをやめたとき version3

この作品は2002年9月ドイツ/ハンブルグで行われた  
ラオコーン演劇祭参加作品である。



## 「ラオコーン」で観たDA・Mの『トマトを食べるのをやめたとき』 谷川 道子(ドイツ演劇)

ドイツはハンブルクにカンパナーゲルという「劇場」がある。かつて鉄工場だった広大な工場跡がいま自在に利用できる複合劇場施設劇場になっていて、そこでの夏の国際的演劇祭が90年代からそのユニークな世界的な注目を集めるようになり、「ラオコーン」と命名されたのが昨年。そして今夏はそのプログラム主宰者を日本の演劇批評家福英良がつとめることになった。ヨーロッパの国際的な演劇祭では最初非ヨーロッパ系主宰者だとか。その福英良によって打ち出されたテーマ「グローバル化時代の歴史と記憶」のもとに十作品が選ばれて八月末からの三週間にわたって上演されたのだが、その中で日本から唯一の招待公演だったのが、DA・Mの『トマトを食べるのをやめたとき』(ヴィトカヴィッチからの『幻覚の効果についての報告』からの引用)である。他にはたとえばピナ・バウシュ振付の『コンタクトホーフ』、スイスのノイマルクト劇団の『メモリー』、オーストラリアからアポリジニ部族による『マヌ(悪霊)のキャリア・ハイライト』等々。詳細な報告は「舞台芸術」第二号に掲載されるので、それを参照してほしい。DA・Mの上演は三週目の冒頭。白い壁と蛍光灯からなる大きな裸舞台に五人のパフォーマーたちが登場して即興的な動きや叫びを始める。竹田賢一の大正琴や電子音楽などからなる即興の音楽や、これもそのつどの即興という照明の中で、演じるのでも踊るのでもない五人のパフォーマーの動きと声と言葉の断片が、現代社会に置かれた「錯乱の身体」をひたすら示していく。ときおり聞こえてくる日本語テキストは、デュラスの『ヒロシマ我が愛』からの引用や(その一節がドイツ語で「私はそれを見た、ヒロシマのニュース映画を見た」と語られたりする)、ベケットの『ゴドー』のボツツの台詞「右、もっと右」、NY9.11のときに警官が誘導してニュースで流れた「Come on this way」といった、演じ手たちの記憶に断片的にインプットされて稽古時に口に出た台詞らしい(明瞭には聞き取れなかったのが残念だった)。だが観客が安心して逃げ込めるような特定の物語や筋、テーマ系、素材といった参照項が殆どない中で、いわば身体的なだけの動きは、何かを表現しては壊すという繰り返しのまま観客に对峙させる。身体を錯乱させていくものは不明瞭・不可視で、ネグリ/ハートのいう「帝国」なのだろう。見えないからこそ、インプットされる断片的な記憶も日常の中では産たれる像を結ばず、想起は歴史を構成せず、対象や世界/システムをつかみかね特定できない奇立ちが、個別に身体的に表現される。何をいったい見た/聞いたのか、見な/聞かなかったのか。演出の大橋宏を中心としたDA・Mはいま、身体が即興的に表現する集中と強度だけでその日ごとの時空と観客に呼応し、そこから観客の想起の引き出しになろうとすることを表現の方法論にしているという。ただそういった基本的に即興という方法論のなかでもろに観客のまなざしに晒される身体は、ことにカンパナーゲルのような大きな空間で上演されるときには、もっと強靱で意識的に現存するための仕掛けと方法論も必要なのではないだろうか。あるいはヴァルツ振付の鍛錬されたダンサー身体による『ノーボディ』に比して、むしろDA・Mの曖昧さ、緩(ゆる)さこそが、いまの非歴史的な日本性を表裏しているのだろうか。何を称して日本的というのか、言う必要があるのかは定かではないが、それはもしかしら先取りとして世界性へと通底していくものなのだろうか。実は三週目は、身体など登場せず白い箱の中からの断片的な男の映像が映し出されるだけのジェスラン作『スライト・リターン』と、二人のダンサーが身体を消滅を踊るサーシャ・ヴァルツ振付のその名も『ノーボディ』とともに、トライアングルのいずれも「グローバル化の(帝国)状況における身体」を問うものであった。その中でDA・Mの上演もたしかに、それらに拮抗しうるだけの、さまざまな問題提起にあふれたものではあった。

## ドイツ新聞評より

この作品は、確かに上演の度に違うのである。4人の女と1人の男がサイコロのように舞台を転がり廻る。――1人の女が、空気を深く吸いながら叫ぶ。その震え、ふらつく様子は狂牛病の動物さながらだ。パンがバシッとかきつけられる。そしてウサギの耳だとか、ペニス、あるいは軽業のバトン、その他ありとあらゆる物に変えられてしまう。疲れ果てた人間は、ついに沈むが如く床に倒れるのだが、薄暗い光の中で、その白い腕と足は、抱持されたあげく周囲に転がっているパンと、ほとんど見分けがつかない。DA・Mは、観客が通常演劇に抱く期待には一切応えず、そのかわりに演劇上の習慣はしっかりと破るのだ。  
ハンブルガー モルゲンポスト紙 2002.9.7.

福氏のラオコーン・フェスティバルのテーマは「グローバル化時代の歴史と記憶」なのだが、日本のDA・Mの俳優たちは、記憶をすべて消し去り、ゼロから出直すことが肝心ののだ、と伝えたいに見える。歩くこと自体すんなりとは行かない。俳優たちは、見えない糸に操られるようによろめきながら歩く。照明が、舞台空間を客席もろとも、精妙に変化する光の中に沈める。――DA・Mは、即興に、つまり動きと音の瓦解に全幅の信頼を置き、音楽の竹田賢一はキーボードで創り出した音の断片を送ってよこす。――抽象的な、あるいは具象的な身振りの脈絡のなさは、どうやら意図されたものようだが、この公演は、なんだか海のものと山のものともつかないのだ。  
タッツ紙 ハンブルグ版 2002.9.7.

## DA・M at Kampnagel 中村 和夫

独自の的方法論を持つDA・Mのハンブルク公演(2002.9)は、現地の観客がどういう反応を見せるか、大いに楽しみだった。会場は元工場の建物をそのまま利用した広々とした空間。普通は適当に仕切りをして劇場風に舞台を設けるのだろうが、DA・Mの場合は工場の壁や柱を見せたままの開放的な空間として使っていた。そして照明は得意な蛍光灯と裸電球。いささか常識破りという感覚が、観る前から伝わってくる。パフォーマンスは客電を落とさずに静かに滑り出した。5人の役者が言葉を発することもなく抽象的な演技を続けていく。なにか筋立てがあるわけでもなく、直接的な意味が示唆されるわけでもない。ここに記号的な解釈は無用である。だが、ほとんどの観客がDA・Mを初めて観るのだから、当然戸惑いが見られた。これをダンスか舞踏と捉える人もいたようだが、それは少々違う。振付けられた形を見せるものではないからだ。観る側も一方的に受容するのではなく、積極的な気持ちで、且つ先入観なく臨んだ方がよい。そうすれば、役者たちが瞬間瞬間の関係性においてひとつの身体表現を選び取り、それがまた次の動きを呼び込む、という面白さに惹きこまれないとはいられない。ハンブルクの観客も自ずとそれに気付いたようだった。演劇祭全体を見てもDA・Mの舞台のラディカルさは際立っており、その発するパワーは確実に観る者に伝わったと思う。

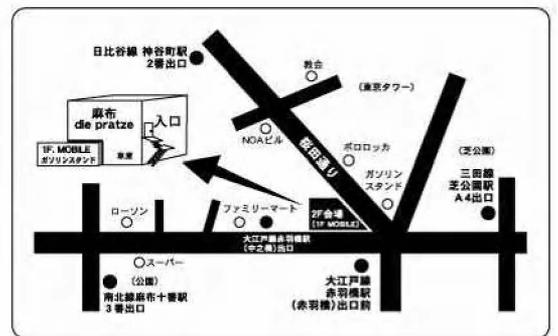


## DA・Mプロフィール

1986年、設立。一貫して戯曲の再現性を放棄し、今、ここに立つ丸腰の身体から生み出す、断片的な動き・声・言葉の構成により、言語の壁を越えた無国籍的な舞台創作を継続する。同時にまた自ら運営する小劇場<プロト・シアター>の場にて、多領域との交流と未知の可能性に開かれた<創造的な環境づくり>を目指し、さまざまなアーティスト達によるワークショップやソロ公演や共同公演、パフォーマンス等の企画を多数手がける。1995年より再び他劇場や国内外のフェスティバルでの公演活動を再開。身体的な即興行為の発掘とその組織化へと作業を進めながら、都市的消費システムに組み込まれない意味以前の生そのものの播らめきを舞台化する。1997年より"Asia meets Asia"への参加を通して、アジアにおける現代演劇との交流を深めている。

### 主な創作活動

- 1986.4 DA・M設立
- 1986.8 『はれ ぼれ ぶら』 利賀国際演劇祭参加
- 1986.12 "SANCTUARY" 日米演劇人共同創作
- 1988～ <プロト・シアター>を拠点に継続的・実験的演劇活動を開始するとともに、同時に、創造的な環境づくりを目指し、同劇場にて様々な企画活動を展開する。
- 1988.4～92.3 シリーズ<コンポジション>Vol.1～12.
- 1989.10 『ホットドッグ』ヨコハマ・アートフェスティバル・パラレルシーン参加
- 1992.5～95.2 <実験演劇シリーズ>Vol.1～22
- 1994.6～95.3 連作『夢』第1～3番
- 1995.10 『それは私の夢じゃない』仙台演劇祭参加
- 1996.2 『LESSON～夢に切りとられた「私」の肖像』
- 1997.3 『So What!～たとえば偶然の花嫁、必然の花嫁』
- 1997.7～8 『a r u k u / アルク』フランス/アビニオン演劇祭'97(OFF)参加作品
- 1998.11 『真昼間の地平線～Daydream Horizon Impro.』Asia meets Asia' 98 参加公演
- 1999.3 FIL VULCANO
- 2000.10.11 "Unbearable Dreams" Clash (香港) との共同創作 東京・香港で公演
- 2001.11 『トマトを食べるのをやめたとき』Asia meets Asia 2001 参加公演
- 2002.3 『Yes』MSA Collection 2002 参加
- 2002.9 『トマトを食べるのをやめたとき』ドイツ/ラオコーン演劇祭参加



## 麻布die pratze

〒106-0044港区東麻布1-26-62F  
T&F03-5545-1385 (水を除く18:00～23:00)

- 大江戸線「赤羽橋」<赤羽橋>出口前 ●南北線「麻布十番」<3番>出口徒歩8分
- 三田線「芝公園」<A4>出口徒歩6分 ●日比谷線「神谷町」<2番>出口徒歩10分

azabu die pratze  
collection 2001